

もできる」ということが理由になり、直後の「スポーティ感覚のデザインでも……独壇場といえる」という結果につながっている、したがって、順接の接続語がなくてはまる。

B [5]段落の初めの「こうした時計」とは、[4]段落で説明されている、メモリー機能やセンサー機能が加わったデジタルウォッチのこと。こうした機能が加わったデジタルウォッチを[B]の前後で具体的に挙げています。したがって、対比・選択の接続語があてはまる。

問二 抜き出した文は、アナログ時計にデジタル時計の機能が加わったことを言っている。したがって、この文の前にはアナログ時計の今までにはない機能が書かれていると推察できる。すると、[8]段落で「アナログ時計でありながら……多機能のアナログ時計ができたのである」と述べているのがとらえられる。

問三 直後に「ので」という原因・理由を示す言葉があることに着目。——線①のことが理由になって、「安く、かつ軽くなる」という二つの利点が生じるのである。もう一つの利点は、6〜7行目の「さらに」という累加の接続語に着目し、「振動やショックに強いこともメリット(利点)である」ととらえる。

問四 段落の中心文とは、その段落で筆者が最も述べたいことが書かれている文のこと。中心文は、その段落の初めか終わりにあることが多い。この段落は、アナログ時計のデザインの多様性について説明しているので、第一文が中心文。第二文以降は第一文の内容をくわしく説明している。

問五 「既成概念」とは、広く社会で通用している考え方。時計の役割について広く通用していることは、時計は時刻を知るためのものということである。

問六 「こうなる」とは、デジタル時計が[5]段落で示されたような機能をもった時計になるということ。これは時計の本来の役割を超えたものになるということで、[4]段落で「これまでのウォッチの既成概念を超える商品」と表現されている。

問七 「具体的に羅列」に着目し、[5]段落において、多機能を備えたデジタル時計が挙げられていることをとらえる。これらは[4]段落で指摘されているメモリー機能やセンサー機能が加わったデジタル時計であり、[6]段落の初めで、「こうなる……生かした商品である」とまとめられている。

問八 [1]〜[3]段落はデジタル時計とアナログ時計のメリットについての説明、[4]〜[8]段落はデジタル時計とアナログ時計の多機能化についての説明、[9]段落はデジタル時計とアナログ時計の将来についての筆者の考え、という構成である。

問九 [9]段落の「時計のデジタルとアナログも共存共栄で発展していくことだろう」という筆者の考えと、エは合う。アの「いずれデジタル時計はなくなっていくだろう」は本文の内容と合わない。イの「アナログ時計とデジタル時計のどちらが優れているか」というようなことは本文中では触れられていない。ウは、デジタルは「振動やショックに強い」という内容と合わない。

〔漢字の成り立ち・部首〕

- 1 (1) ウ (2) イ (3) ア (4) エ (5) ア (6) エ (7) イ (8) エ

- 2 (1) りっしんべん (2) えんによう (3) くにがまえ (4) けものへん (5) にくづき (6) さら (7) おおがい (8) はつがしら

- (9) あなかんむり (10) ござとへん (11) まだれ (12) ゆきがまえ(ぎようがまえ)

- 3 (1) うかんむり (2) しめすへん (3) りつとう

解説

- 2 (5) 部首は「月」で、「肺・腸」など体の部分に関係する漢字に用いられる。「服」などの「つきへん」ではないので注意しよう。

- (9) 部首は「宀」。「うかんむり」ではないので注意しよう。

- (10) 部首は「尸」で、左側にあるので「ござとへん」。「尸」が右側にあると「おおざと」。

- 3 (12) 部首は「行」。「イ(ぎようにんべん)」ではないので注意しよう。

- (1) 「宀(うかんむり)」をつけて、「容・守・察・審」の漢字ができる。

- (2) 「ネ(しめすへん)」をつけて、「禪・祝・社・神」の漢字ができる。

- (3) 「リ(りつとう)」をつけて、「刊・判・則・創」の漢字ができる。